

レッジョ・エミリアの幼児教育と保育環境
— Winter Institute 1998と「子どもたちの100の言葉展」
の実践記録から —

Reggio Emilia's early childhood education and
an environment of nursery school
— From Winter Institute 1998 and the practice records from
the exhibition of “The Hundred Languages of Children” —

常 田 奈津子¹⁾

Natsuko TOKIDA

Abstract

This report is on Reggio Emilia's preschool educational philosophy and nursery environment. “The Hundred Languages of Children” is a large and compelling exhibition where children's works are on display in an original way, and the process of education is shown as a documentary. Through this exhibition, people in Europe and North America began to direct their attention to the educational philosophy in about 1980, and then it became an international attention; now the educational practice is done in many countries as “Reggio Emilia Approach”.

Reggio Emilia's environment is changing one; comfortable and flexible, and it invents new ways of understanding and supporting children's learning, teachers' development, and the parents' participation.

In Reggio Emilia City, there are two types of public nursery facilities; infant-toddler centers for 0-2 years old, and preschool for 3-5 years old. Now there are 13 infant-toddler center and 19 preschools. Then, we explain the environment and practice done in “Solo” Infant-toddler Center, “Martiri Villa Sesso” Child Center, and “Balducci” Preschool visited in January in 1998.

keywords : children's education, environment, documentary

I はじめに

レッジョ・エミリアの『子どもたちの100の言葉展』が2001年6月に、東京で開催された。イタリアにあるレッジョ・エミリア市で行われている保育実践は「子どもたちの100の言葉展」という形態で子どもの作品を独自の方法で展示し、ドキュメントとして教育活動のプロセスやエッセンスが表現されている。アメリカ合衆国で行われた展示について、パメラ・ホークは次のように述べている。「『子どもの百のことば』はレッジョ・エミリアで発展した保育へのアプローチの記録で、規模も大きく魅力あふれた展示会です。(中略)210もの大きなパネルと16の事例があつめられています。」「保育者が撮影した表現豊かな写真や、子ども達が創作した驚くべき作品の数々が、たちまちすべての人のここをとらえました。」⁴⁾

この展示会を通じて、1980年ごろからヨーロッパ、そして北アメリカでその教育理念が注目され国際的に関心が高まり、現在はレッジョアプローチとして多くの国において教育実践が展開されている。

2000年までは、日本に紹介された文献は少なく、私がレッジョ・エミリアの幼児教育を知ったのはカナダ、カリブ大学での研修中(1993~1994)であった。その時はカレッジが試みる新しいカリキュラムの一環として理解していたが、帰国後、いくつかの文献にあたり、カリブ大学の付属保育センターで行われていた保育実践がレッジョアプローチであったことがわかった。ここでの実践のリーダーは大学で実習カリキュラムと付属保育センターとが協力して独自のシステムで行っていた⁹⁾。

レッジョ・エミリア市の乳幼児教育は第2次大戦後に起こった教育運動、保育実践から始まり現在のレッジョアプローチへとつながっていく。その歴史の流れ

1) 日本女子体育大学(助教授)

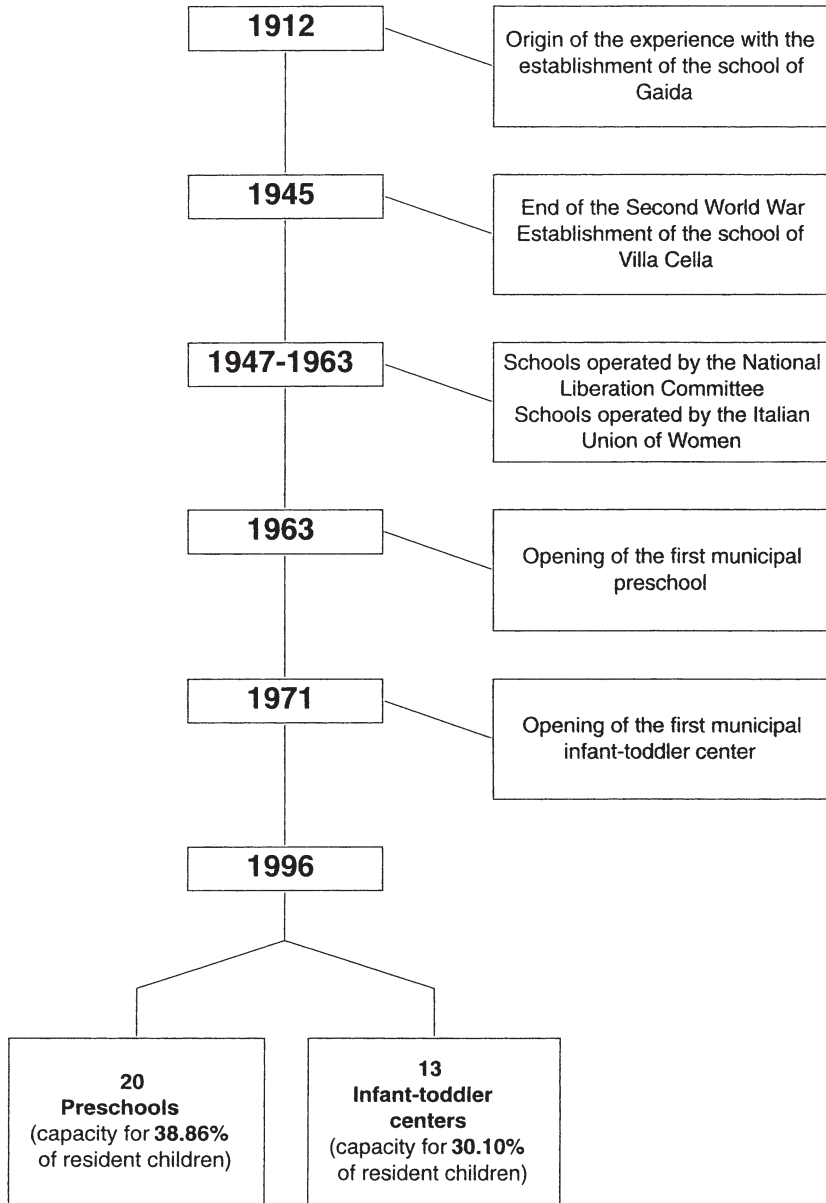


図1 レッジョ・エミリアの幼児教育の歴史
(The municipal infant-toddler centers and preschools of reggio emilia p.12 より)

を示したのが図1である。それについて、尾崎春人(1995)⁶⁾、石垣美恵子ら(1998)¹³⁾が詳しく述べている。レッジョ・エミリアの教育活動を支え、理論化したのが教育学者のロリス・マラグッツィである。実際にマラグッツィと出会い、レッジョ・エミリアの教師達と交流をもったイタリア教育学の田辺敬子氏は「レッジョ・エミリアで行われている幼児教育以前に、小学

校の先生の教育実践があった。それは、カリキュラムにとらわれず日常の活動を中心に身近な出来事をとらえて、子どもと向き合うものである。」「その教育理念を引き継ぎ、幼児教育で実践したのがマラグッツィを中心としたレッジョ・エミリアの幼児教育者たちである。」⁶⁾と記している。また「レッジョ・エミリアの保育環境は、変わりゆく環境・作りながら活動できる、一

人一人が居心地のよい環境・耳を傾けられる空間・関係がつけられる空間・多様性のある空間・発展性・柔軟性のある空間である。」さらに「子どもと大人が分担できる場や仕事をする場は、キッチンやアトリエがそれにあたる。また子ども、先生、親と一緒に参加でき、いろいろな立場の人が協力、助言ができるオープンな空間として広場 (Piazza) がある」と述べている。私たちが子どもの教育・保育を考える時、こどもをとりまく保育環境がいつの場合も前提となり、物、人、空間、時間がひとつになって成り立ち、それが保育施設のみならずその地域へと広がっていく。そして、これを実践しているのがレッジョ・エミリアの幼児教育である。

そこで、今回は1998年(1月18日~24日)にレッジョ・エミリア市で開催された Winter Institute 1998 で学んだレッジョ・エミリアの幼児教育の理念と保育環境について報告する。その方法は、市で見学した乳幼児センターと幼稚園での体験記録から1) 保育空間、2) 保育を支える人、3) 子どもの活動とに分けてレッジョ・エミリア保育実践とその環境を具体的に述べる。さらにベグゴジスタ(教育専門家)、アトリエスタ(美術専門家)の講演と2001年の「子どもたちの100の言葉展」でおこなわれた市長はじめ主要なメンバーの講演を基礎資料とする。

II 結果と考察

1 保育空間

レッジョ・エミリア市の保育施設は0歳児から2歳児までの乳幼児センターと3歳児から5歳児までのプレスクールがある。表1はレッジョ・エミリア市の施設の数と就園率を表わしている。公立の乳幼児センターは13ヶ所で就園率30%、プレスクールは19園で39%である。

そこで、Winter Institute1998年1月に訪問した3つの保育施設について、記録とそれぞれの保育施設が出している資料集で説明する。

1) “Sole” 乳幼児センター⁸⁾

この乳幼児センターは他の施設として使用していた建物を市が借りて1976年にレッジョ・エミリア市の保育施設とする。子どもの数は0~3ヶ月:4名、4~9ヶ月:7名、10~18ヶ月:15名、18~24ヶ月:19名、24~36ヶ月:24名の69名である。スタッフは、保育者が乳児担当5名と幼児担当6名、調理1名、フルタイムヘルパー3名、パートタイムヘルパー3名であ

表1 保育施設の数と就園率

(The municipal infant-toddler centers and preschools of reggio emilia p.6 より)

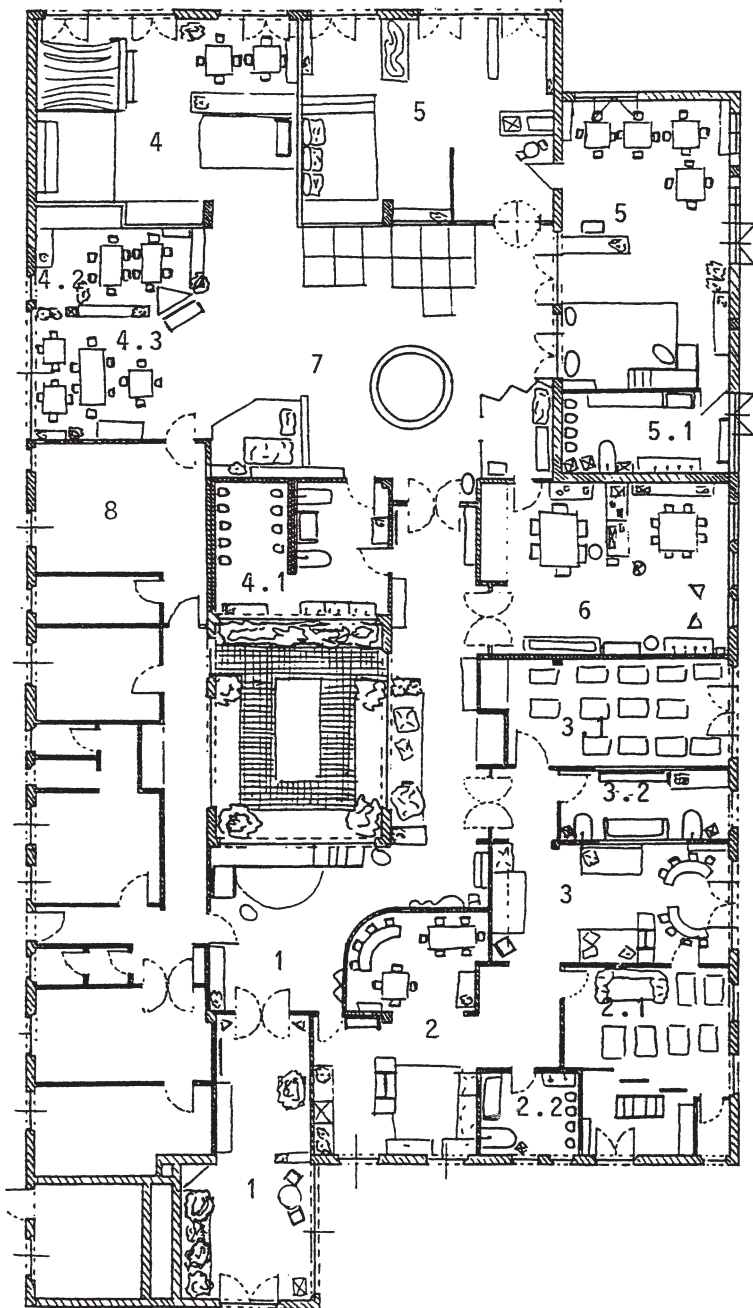
Infant-toddler centers operating in the Municipality of Reggio Emilia			
Managing organization	No. of Centers	No. of children served	Percentage of total resident children
Municipality	13	820	30.10%
Cooperatives	3	130	4.77%
Religious orders	1	3	0.11%
Private	1	14	0.51%
Total	18	967	35.49%

Preschools operating in the Municipality of Reggio Emilia			
Managing organization	No. of schools	No. of children served	Percentage of total resident children
Municipality	19	1,299	38.86%
State	10	533	15.94%
Religious orders	19	1,165	34.85%
Charities	2	128	3.83%
Private	1	40	1.19%
Total	51	3,165	94.70%

る。

室内は、特に衛生面、健康面を最優先にデザインされている。その主な点をあげると、①乳児の保育室は年齢の大きい幼児から離れた場所におく。小さいグループを構成し、寝る場所は広くとる。②洗面所、教師のための部屋、キッチンは同じところにまとめ、子どもや、その親の目の届かないところにおく。③幼児の2組(18ヶ月~24ヶ月、24ヶ月~36ヶ月)は開放的なオープンスペースにしてあり、もうひとつの幼児の組(10ヶ月~18ヶ月)は、乳児の部屋と隣りあわせて通り抜けられるようになっている。④ドアは庭へ直接出入りできるよう開けてある。透明な窓は上下に分かれて、オープンに光や外の空間が見通せるようになっている。室内の中心となるスペースのアレンジは親たちと一緒に継続して行なっている。

屋外のスペースは、三輪車の走れるトラックや、いくつかの高くて小さな山、登ることができるフレーム、



LEGENDA:

- 1) Ingresso
Entrance
- 2) Sezione "PICCOLI"
Toddlers from 11 to 18 months
 - 2.1) Spazio per il sonno
Sleeping area
 - 2.2) Bagno
Bathroom
- 3) Sezione "LATTANTI"
Infants
 - 3.1) Spazio per il sonno
Sleeping area
 - 3.2) Bagno
Bathroom
- 4) Sezione "MEDI"
Toddlers from 18 to 24 months
 - 4.1) Bagno
Bathroom - Changing area
 - 4.2) Mini atelier
 - 4.3) Spazio per il pranzo
Dining area
- 5) Sezione "GRANDI"
Toddlers from 24 to 36 months
 - 5.1) Bagno
Bathroom - Changing area
- 6) Atelier
- 7) Piazza centrale
Central "piazza"
- 8) Cucina
Kitchen

図2 "SOIE" 乳幼児センター

動くことを通して発見できるような迷路、音・匂い・色など感覚にうったえて発見できる自然物など、いくつかのタイプの異なる環境作りをする。その他に野菜畑、花の苗床、屋外で食事をする場所などがある。各部屋から屋外へ出られるようになっている。

次に、室内の環境構成を説明する（見取り図2）。

No.1: エントランスは玄関と子どもを受け入れる場所との2箇所である。入ってすぐの右側にある壁には写真とコメントが書いてあるパネルがある。それには、町の歴史、親と一緒にする活動<ドラムを一緒に

表2 乳幼児センターと幼稚園の勤務スケジュール
(The municipal infant-toddler centers and preschools of reggio emilia p.20, 21 より)

Staff work schedule		
Total hours per week	With the children	Other activities*
36	31	5
* Professional development, planning, preparation of materials, community management, meetings with families, other meetings, etc.		
Staff work shifts		
Role	Schedule	
4 Teachers*	8.00 a.m.	2.00 p.m.
4 Teachers*	8.33 a.m.	4.00 p.m.
2 Teachers*	9.03 a.m.	4.00 p.m.
1 Teacher*	9.09 a.m.	4.00 p.m.
Extended day teacher (part-time)**	3.30 p.m.	6.30 p.m.
Cook	8.00 a.m.	3.21 p.m.
1 Helper***	8.00 a.m.	3.21 p.m.
1 Helper***	8.30 a.m.	3.51 p.m.
1 Helper***	9.39 a.m.	5.00 p.m.
Part-time helpers	4.00 p.m.	7.00 p.m.
* weekly rotation ** plus one morning per week *** weekly rotation		

Staff work schedule		
Total hours per week	With the children	Other activities*
36	30	6
* Professional development, planning, preparation of materials, community management, meetings with families, other meetings, etc.		
Staff work shifts		
Role	Schedule	
Classroom teacher*	8.00 a.m.	1.48 p.m.
Classroom teacher*	8.27 a.m.	4.00 p.m.
Atelierista	8.30 a.m.	3.33 p.m.
Extended day teacher (part-time)**	3.30 p.m.	6.30 p.m.
Cook	8.00 a.m.	3.21 p.m.
Helper***	8.00 a.m.	3.21 p.m.
Helper***	9.00 a.m.	4.21 p.m.
Part-time helpers	4.00 p.m.	7.00 p.m.
* weekly rotation ** plus one morning per week *** weekly rotation		

たたいている・美容師のお母さんが髪をカットしている・カメラやビデオを子どもが撮っている・人形劇をするお母さん、教師の仕事の様子、子どもの活動などが見やすくレイアウトされ、『この保育はこのように行われています』とインフォメーションされている。また、親が先生とコンタクトが取れるようにカレンダーがかかっている。

子どもを受け入れる場所はホールのようになっていて、子どもの目の高さにあわせて鏡が貼ってあり、壁に沿って緩やかなスロープになっているその壁にも鏡がある。

No.2: 幼児室(11~18ヶ月)はドアを入るとプレイルームがあり、動けるスペースと、絵本・パズルなどのあるカーペットスペースとの2つのコーナーに分かれている。

食堂は、一般の家庭のダイニングルームを再現したような落ち着いた雰囲気のある場所で、壁には特大の木のスプーンとフォークが飾られている。

No.3: 乳児室はベッドルーム(Sleeping room)が広く、天上にはやわらかい布がかかり、子ども一人一

人のベッドには各自のお気に入りのものがあつた。寝る時間も一人一人違う。壁には、赤ちゃんの手の届く場所にモミュメントがかかっている。

No.4, 5: 幼児室(18~24ヶ月, 24~36ヶ月)は、ゆったりとした空間をつくっている。

隠れる場所はカーテンが付けられて、その中は鏡が貼ってある。キッチンコーナーは、天上を布でおおい、そこには本物のスパゲティ、パスタ、パンなどが置いてある。構成遊びコーナーは、ブロックなどが引き出しに取められ、すぐに取り出せるようになっている。ライティングコーナーはタイプライター、レコーダー、懐中電灯など家庭にあるものをそのまま置いてある。パペットコーナーには人形がかかっている、スポンジと木で削られている。専門家が制作する。舞台は広場(No.7)にある。

No.7: 広場(piazza)は幼児室に囲まれたオープンなスペースである。身体活動ができる空間、ドレスアップ(着替え)コーナー、劇場コーナーに大きく分かれていたが、どの遊具も移動可能である。

No.6: 大きなアトリエは、いろいろな材料が準備さ

Mappa-Plan

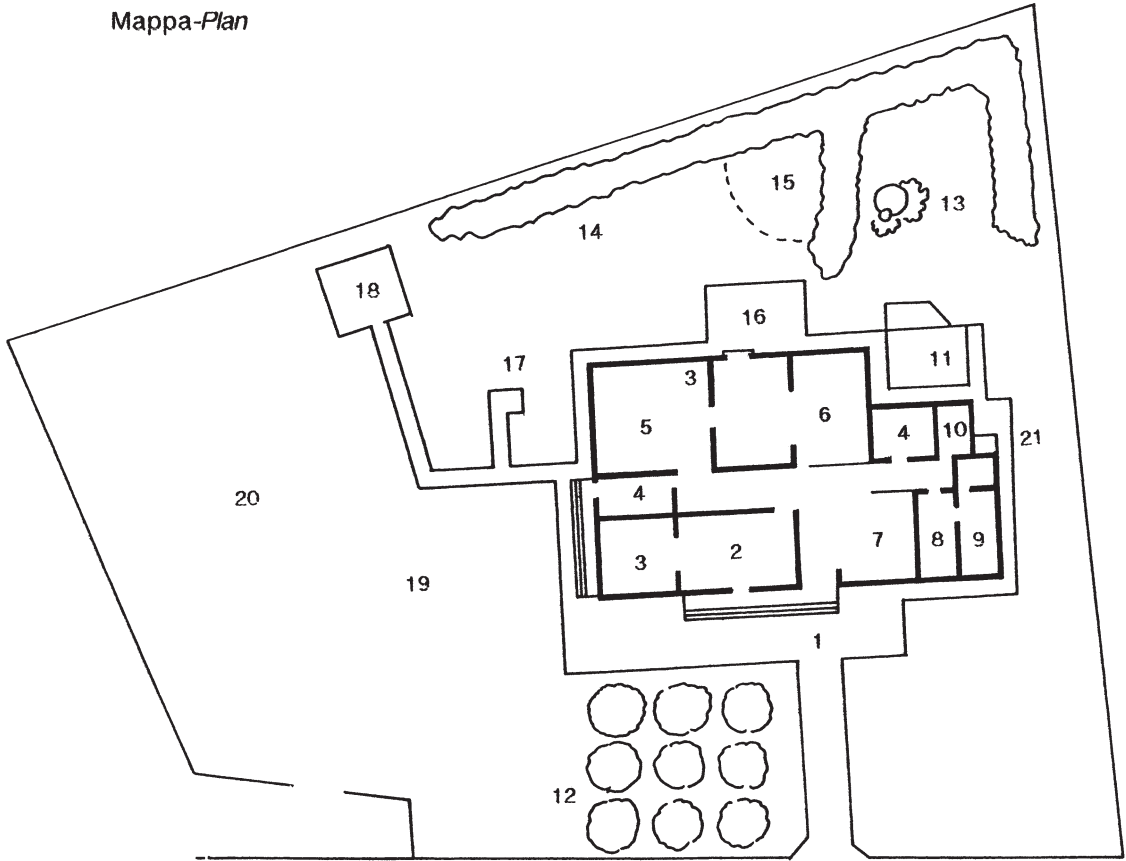


図3 “Martini Villa SESCO” 保育センター

れている。作品が飾られ、壁にはドキュメントされたパネルが貼ってある。各組にミニアトリエはなかった。

保育者は、訪問者との meeting の中で、保育空間についてどのようなところを重視しているかを次のように述べる。身体活動をするスペースは広くとって、安全を第一に考える；子ども達の作品はできるだけ部屋のいろいろな場所に飾っておく（立体的なものが多い）；それぞれのスペースには保育者のアイデアをたくさん出す；ひとつひとつの部屋についてそれぞれがどのような役目をもっているか明らかにして環境を整える。例えば食事をする場所と遊ぶ場所は別にする；ハーモニーを大切にする；子どもはここで長い時間生活するのでホーム（家庭）としての部屋作りをしている。

この meeting から保育者が情熱をもって保育し、環境構成をしていることがよく伝わってきた。また、保育室はシックで落ち着いた色合いとメタリックな色調がコントラストをもち、大人の雰囲気を持っていたが、

それぞれの保育室が個性的であり、保育者の感性が出ている環境空間であった。

遊具や教具は親の協力を得て、手作りのものがほとんどである。室内には自然の光が入るようになっており、教具、遊具の色は淡い色が多くとりいれられていた。

2) “Martiri Villa Sesso” 保育センター²⁾

“Sesso” は 2 才から 6 才の子ども 48 名がいる保育施設であり、クラス数は 4、5 歳児クラスと三歳児以下の 2 組である。各組に 2 名の保育者がいる。さらに、ヘルパーがフルタイム 2 名、パートタイム 1 名、アトリエスタ 1 名、給食担当と加えると総勢 9 名のスタッフが働いている。ペダゴジスタは他の園とかけもちである。

この園は、市の中心から離れたカントリーサイドにあり、“グリーンセンター”と呼ばれている 2 つの保育施設のひとつである。その歴史をみると、第二次大戦後、1945 年に Italian Women’s Union によって創ら

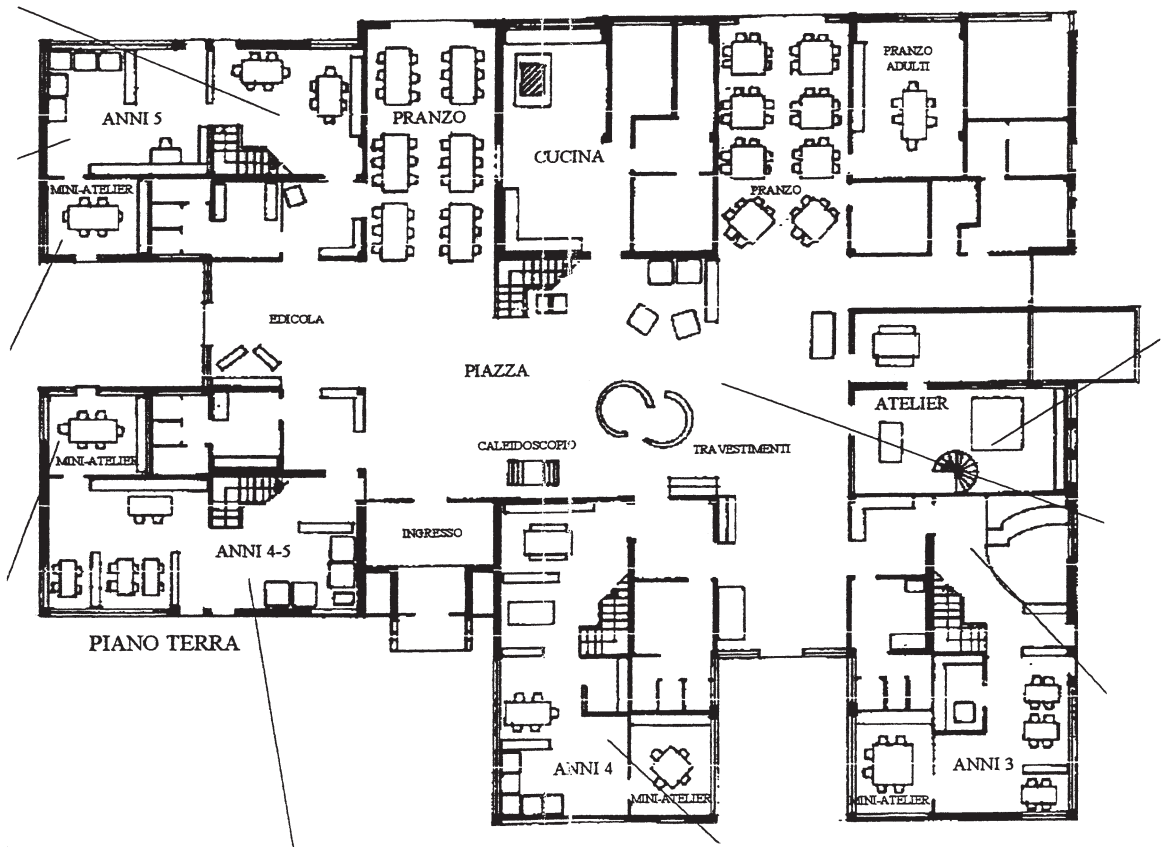


図4 “BALDUCCI” プレスクール

れ、1971年までは独自の道を歩んできた。

ここは小さい田舎の村にあるが、自然がそのまま残された場所である。1991年からはレッジョ・エミリア市の“グリーンセンター”となった。そして、まだ昔の田舎暮らしの習慣が残されている地域でもある。自然を素材として活動が展開され、グリーンエリアを多く持つ場所に園舎は建っている。園舎の見取り図3から説明すると、平屋の園舎を囲むように、野菜畑(No. 18)、果樹園(No. 12)、池(No. 13)、生垣(No. 14)、うさぎ小屋(No. 20)などがある。

見学した保育室のひとつ(No. 5)は、積み木などがあるコーナー、ブックコーナー、ミニアトリエ、個人の作品が入っている棚とポストのあるコーナーの4つのコーナーに分かれていた。また、ひとつの壁には、共同制作の過程を4名の子どもの行動と言葉で示し、そこに先生のコメントと展開図を記述し、10分間のスポットドキュメンテーションにまとめてあった。もう一方には、園で飼っている猫についてそれぞれの猫の

プロフィールが子どもの書いた文字と絵で表現されていた。

野外の活動は、ぶどうの収穫時にぶどうを食べ、ワイン作りに参加する。子供達が散歩や自然探索をとうして地図を描く。また、馬、ミミズクやカエルなどに触れる。持ち帰った自然物を使って表現する。コレクションされた自然物は箱の中でサンプリングする。生き物は水槽で飼う等がある。

3) “Balducci” プレスクール⁷⁾

このプレスクールは2つの園が合併して新しく開園した。オリジナルの園は、1968年と1975年に開園し、共に2クラス規模の施設であった。1991年に新しい学校のための設計プロジェクトがはじまる。1992年8月からは2つの園を新しい建物に移し、こども達は折に触れて工事現場を見学し、出来上がる過程に接した。公式な開園式は1995年6月20日に子どもの家族、建物にかかわった人達、地域の人達と一緒にこなった。

子どもは100名で、クラスは4組で3歳児、4歳児、

5歳児と混合クラス（4・5歳児）が各1組である。スタッフは、クラス担当教員は8名、フルタイムヘルパー3名、パートタイムヘルパー3名である。さらにアトリエスタ1名、特別なプログラムの担当非常勤講師2名、給食担当1名がいる。

新しい園舎は、ガラス張りである。ピアッア（広場）は2階までの吹き抜けである。子どもが活動する場は一階で、教員の部屋、会議室などが2階にある。この建物を「私たちの学校はとても美しく、昼食をとっているとコップをどうして太陽に光が見えてくる。透명한ドームの屋根からは、たくさんの光が入り、また雨の日はとても大きな音がする。」¹⁷⁾と記述している。

2 保育を支える人

子どもを支え、保育をささえるのは親、保育者、ペダゴジスタ、アトリエスタである。さらに市長はじめ自治体の全面的なサポートがある。ペダゴジスタとは教育学者であり、教育全般にわたりアドバイスをし、運営にも直接かかわる園長のような役目も持っている。アトリエスタとは美術教育を受け、子どもたちの創造的プロジェクトをプランし、実践する。

この両者は共同して子ども達の創造的な表現を支援し、それぞれの乳幼児センターやプレスクールで独自のプロジェクトを展開している。また、保育者のトレーニングプログラムを作成し、保育者の指導にあたり、ワークショップや展示等の企画運営にかかわっている。これがレジャージュ独自のシステムである。

保育者(教師)は、日々の生活を子どもとともに送り、一人一人の子どもの様子を身近で受け止める。活動(プロジェクト)を実際に行う場合は、ペダゴジスタやアトリエスタに助言を求め、話し合いをもって共同・協力して進める。この活動(プロジェクト)とは、保育者と子どもと一緒に行動で数日から数ヶ月にも及ぶことがある。その内容は『偶然の出来事、着想、ひとりあるいは数人の子どもの出た問題、または、保育者の体験からはじめたもの』である。さらには、同じテーマで何度も行われるプロジェクトもある。

3 保育活動

1) 保育室での活動

子どもが活動している午前中に訪問した“Balducci”プレスクールの子どもの活動を述べる。

5歳児クラスでは、男の子が金属製で大掛かりなオブジェを作っている。自転車、ラジオ、電話機などの

部品、カセットテープ、チェーン、カギなどを使っていた。女の子は、別のテーブルで葉っぱ、種、木の実と色紙を使って制作していた。それぞれが数人のグループで行っていた。

4歳児のクラスは、『お店屋さん』をテーマにプロジェクトが行われて、実際に町に行き買い物をしたり、お店屋さんを見学して時間をかけて進めていく。この部屋には、子どもが入って遊べるスペースの木の枠と白い布で出来たお店が出来ていて、そろばんや、子どもの作ったお金置いてあった。

その隣では女の子数人がOHP台（高さは子どもの腰から胸のあたりまでであった）を囲んで、その台から出てくるライトの光を使って遊んでいた。その台の上にはいろいろな色のセロハン紙、セロテープ、リボン、はさみが置いてあった。

また、広場では、男の子2人が木製のマット入れを転がしてきて、マットを出して、迷路と家をつくっていた。ドレスアップコーナー（2つの半円形の衝立で、外からは見えないようになっている）の中では洋服がフックから全部落ちていて、髪ざりをつけた女の子が先生と一緒に着替えをして遊んでいた。

配膳のために帽子をかぶった子どもが食事の用意をしていた。

この日は半分の子どもは先生の引率でスポーツジムに行っていた。

2) アトリエで行われるプロジェクト

“Balducci”プレスクールのクラスにあるミニアトリエでは、4人の子どもが粘土で劇場（シアター）の柱を作っていた。アトリエスタが、写真をみながら柱の土台の部分に子どもに説明し、子どもの行動を記録していた。子ども達は自分で作った円柱形の柱と一緒に並べて比べ、高さをそろえる。粘土の塊をつなげるためにブラシに水をつける。子どもは立ったり、座ったりしているが、その位置からあまり動かないで粘土に集中していた。

大きなアトリエでも、子どもとアトリエスタが粘土で制作をしていた。テーマはミニアトリエで行っていた『劇場』である。部屋には、写真、鉛筆画など『劇場』に関する資料が子どもに示されていた。作業台を囲んで4人の子どもと先生が話をし、2人の子どもがエンピツで画用紙に絵を描いているところで子どもの話を聞きながら先生は記録を採っていく。他の2人は、粘土の塊をとって、粘土をつまむ、たたく、まるめる。30分経って一人一人の粘土板に塊がおかれて、

平面に伸ばした粘土の塊を立てて立体的なものに変化させる。先生は一人一人をよく見ているが、声をほとんど出してない。

このように、アトリエで活動する子どもと先生、保育室で素材を組立てて制作している子ども、保育室にあるロフト(ベッドがたたんであった)にあがってごっこ遊び、OHPを使った活動などさまざまな活動を見ることができた。そこにいる子ども一人一人の遊んでいる姿からは日本の子ども達が行っている日常の保育活動とそれほどの違いを感じなかったが、しかし、保育者がどのように子どもと関係をつくって教育しているか、保育環境をどのように整えるかなど目に触れにくいところに、レッジョ独自の教育理念があるのではないかと考える。そこで、代表的なプロジェクトを実践しているアトリエスタのヴェア・ヴェッキの日本での講演の中から考察していく。

はじめに、美術家としての専門性と保育者との関係を「アトリエスタは、いつも園にいて保育者と子どもと一緒に生活する。学校と分離してはいない。しかし、保育者とはちがう存在である。保育者とは違う言葉使いで話をするし、より科学的な思考をもっている」と述べている。またアトリエの様子やアトリエスタの仕事については「アトリエには、まるでラボ(実験室)のように多くの材料、素材、プロジェクトのための資料や子どもの製作中の作品などが置いてある。私たちは、出来上がった作品を評価せず、制作過程を大切にす。そのプロセスは見えにくく、表現しにくいものであるが、それを筆記し、カメラやビデオ、テープレコーダーなどを使って記録をする。この記録はある断面でしかないが子どもを理解する手段となりうる。この方法で記録するには、まず、子どもと友達になることが前提になる。いつも子どものそばにカメラがあることが日常の習慣としている。記録は子どもがどんなことに興味を持っているか、どんなことをしたいかを知る手段(Tool)となり、教師が内省するため、親との話し合いのための手段でもある。」そして、最後に大人の役目を「子どもに主体性があったら、子どもは自主的、創造的に問題を解決しようとするだろう。そのためには十分な時間が必要となる。この時間をつくるのが大人の役目である。大人は知識を子どもに伝えようとしないで、子どもがすでに頭の中に持っているものを外に出せるよう引き出してあげればよい。子どもの可能性を確信し、古い規範を打ち破れるようになるには、教師が『子どもの惑星はまだよく探査できてい

ない。これから発見しよう』と謙虚にならなければならない。そして、子どもの事を知るためにいつも子どもと一緒にいて実感することが重要である。また『この時はどうしようか』と迷う時には、立ち止まって子どもをよく見る、聞くことが大切である。」と述べている。

以上、いくつかの側面から考察みると、レッジョ独自の教育メソッドは保育者、親そして専門家としてのアトリエスタやペダゴジスタがそれぞれの役割を持って幼児教育にたずさわり、いつも同じではない子供達と共に楽観的にそしてポジティブに実践していく中で生まれている。

III おわりに

2001年6月に開催された「レッジョ・エミリアの『子どもたちの100の言葉展』」をきっかけにいくつかのレッジョ・エミリアに関する訳書が出版され、その独自性のある幼児教育がより身近なものとなった。この機会にその教育理念とじっくり取り組んでみたい。

1998年のWinter Instituteでの講演で一番印象に残ったのは「ここでの実践にはレシピはありません。誰かのコピーをするのではなく自分自身(myself)の保育実践をおこなってください。」という言葉である。そこから、形だけ真似ても、実践の本質には近づけないということを感じた。

レッジョ・エミリアの保育実践に触れてみて、保育空間、保育環境は大人と子どもが作り出していくものであるが、特に、保育者の役割は大きい。1日1日の変化の中で、子どもと向き合いながら過ごし保育者が自ら考え、いかに子どもを理解していくか、また、多くの実践に耳を傾けながら、自分の保育を見つけていくことが大切なのだと考える。

引用文献

- 1) Besco Flavio, 玉置哲淳, 石垣恵美子 1998 Reggio Emilia Approach ②-実践プロジェクトの中から-日本保育学会第51回大会研究論文集 p.360~361
- 2) Centor Verdeperl' Infanzia "Martiri di Sesso" 1998 Noi siamo qui per fare e per pensare; Winter Institute
- 3) 石垣恵美子, 玉置哲淳, Besco Flavio 1998 Reggio Emilia Approach ①-歴史的経緯と理論的枠組み-日本保育学会第51回大会研究論文集 p.358~359
- 4) J.ヘンドリックス編著 石垣恵美子, 玉置哲淳監訳

- 2000 レッジョ・エミリア保育実践入門 北大路書房 p. 78～79
- 5) マリオ・ローデイ (田辺敬子訳) 1998 わたしたちの小さな世界の問題, 晶文社, p.429～430
- 6) 尾崎春人 1995 北イタリアーレッジョ・エミリア (Reggio Emilia) 地区の幼児教育の実態とその波紋 幼児教育研究会
- 7) Scuola Comunale dell'Infanzia 1998 Ernesto baluducci; Winter Institute
- 8) Sola 1998 Asilo nido sola; Winter Institute
- 9) 常田奈津子 1996 日本女子体育大学紀要, 26巻, p. 101～111

参考文献

- 1) Edwards. C, Gandini. L, 1993 The hundred languages of children –The Reggio Emilia Approach to early childhood education–; Ablex publishing Corporation
- 2) Joanne Hendrick 1997 First steps toward teaching the reggio way; Prentice Hall
- 3) Llella Gandini 1993 Fundamentals of the Reggio

- Emilia Approach to early childhood education; Young Children p.4-8
- 4) Lois Malaguzzi 1993 For an education based on relationships Young Children p.9-12
- 5) Municipality of Reggio Emilia 1996 Catalogue of exhibit The hundred languages of children; Reggio Children
- 6) Municipality of Reggio Emilia Infant-toddler Center and preschool 1996 Historical notes and general information; Reggio children
- 7) Municipality of Reggio Emilia 2001 子供達の100の言葉 学習研究社
- 8) Sue Bredekamp 1993 Reflections on Reggio Emilia Young Children p.13-17

(平成13年9月21日受付)
(平成13年12月20日受理)